

・はじめに

短編小説「羅生門」は、一九一五（大正四）年九月に脱稿され、同年十一月の『帝國文学』に掲載された。初出当時は「芥川龍之介」ではなく、「柳川隆之介」という筆名での発表となっている。のちの一九一七（大正六）年五月に第一創作集『羅生門』（阿蘭陀書房）に収録され、ついで一九一九（大正八）年に作品集『鼻』に収録されるが、その都度大幅な改稿を施されることとなった。第一創作集のタイトルに冠されているところに作者自身の愛着も伺え、「老人」（『新思潮』大正三年五月）や「ひよつとこ」（『帝國文学』大正四年四月）などの先行作品をさしおいて、芥川龍之介の実質的な処女作品として位置づけられている。先行研究の蓄積も豊富であり、理智と諧謔とを縦横に駆使した芥川龍之介という小説家の実質的な「誕生」を告げる傑作であるという評価そのものについては今後もおおきく変わることはないと思われる。

しかしながら、後述するように、これまで下人が引剥ぎという行為を遂行するに至るまでを説明する決定的な見解は示されていないと考えられる。そこで本論では、「羅生門」のテクストを読み解くことを通して、羅生門の下で雨やみを待つ受動的で思弁的な存在にとどまっていた下人が暴力的な行為主体へと変貌してしまうにあたっての論理の飛躍を読みとり、そこに「怖れ」や「憎悪」といった感情、——自己の内部に捉えきれない〈外部〉への情動が介在していることを指摘したうえで、一九一九（大正八）年の作品集『鼻』に収録された定稿の「下人の行方は、誰も知らない」という結

びの一文に（自己の「解放」や「発見」ではなく）自己自身における他者性の発現としての「誰も知らない」自己への変貌というベクトルを読みとりたい。この視点を導入することによって、下人の造型は近代的な自我を具有する個人としてではなく、自己分裂性を帯びた矛盾的な存在であることが導きだされるはずである。

### ・先行研究

前述のように、「羅生門」をめぐる考察は芥川龍之介研究における大きな発火点のひとつであった。初出当時こそ「黙殺」されはしたものの、一九一七（大正六）年の第一創作集『羅生門』の刊行後、江口渙は、「芥川君の作品の基調をなすものは澄切つたとされたヒュモアである」<sup>(1)</sup>といい、「芥川君の凡ての長所が自然に交錯して現はれてゐる点でその準処女作である『羅生門』は推奨措く能はざる者である」<sup>(2)</sup>と絶賛している。

芥川研究の礎石を築いた吉田精一は、「羅生門」について、「下人の心理の推移を主題とし、あわせ生きてするために、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばく」<sup>(3)</sup>ことが、この作の主眼であったとの見解を示している。作品を作者の現状と結びつけ、その全貌を解明しようとした吉田論は、今日においても「羅生門」研究における定説のひとつを構成している。

つづいて、「羅生門」の作品研究に通底する基本的な枠組みを提示した三好行雄は、「芥川龍之介の資質と可能性の最初の具現であり、歴史小説の方向と形をさだめた原型である」と評している<sup>(4)</sup>。作中後半における老婆の発話に注目した三好は、作品の主題を「追いつめられた限界状況に露呈する人間悪であり、いわば存在そのものの負わねばならぬ苦痛」であるとす。——自己の行為に「第三者の〈許し〉」を主張する老婆と、同じく「許しあう世界」に身を投じた下人とが、互いを許しあうことで人間存在のままがれがたい事実を顕在化せしめたというのである。しかしながら、この三好論には反論が少なくない。たとえば浅野洋は、老婆の話を聞く下人が「冷然として」いることを指摘し、「許しあう世界」の現前という見方に異論を唱えた<sup>(5)</sup>。また笹淵友一は、「愉快な小説」という作者

(1) 江口渙「芥川君の作品（上）」『毎日新聞』大正六年六月二八日、東京日日新聞社

(2) 江口渙「芥川君の作品（中）」『毎日新聞』大正六年六月二九日、東京日日新聞社

(3) 吉田精一「羅生門」『近代文学鑑賞講座11 芥川龍之介』角川書店

(4) 三好行雄「無明の闇——『羅生門』の世界——」『芥川龍之介論』筑摩書房、一九七六

(5) 浅野洋「芥川龍之介——『羅生門』をめぐる——」『日本の説話』6、近代東京美術、一九七四・三